

# “牛と人と地域”の能力を最大限に 引き出す基本に忠実な酪農

岩見智成（酪農経営・大分県日田市）

## 地域の概要

岩見牧場のある日田市は大分県の北西部に位置し、福岡県と熊本県に隣接。周囲を阿蘇・くじゅう山系や英彦山系の山々に囲まれ、山系から流れる豊富な水が日田盆地で合流し、市民の生活や産業を潤している。夏には日本一の高温も記録する一方、冬には氷点下で雪も降るなど、季節によって寒暖差が激しい。

古くから北部九州の交通の要衝として栄え、江戸時代には幕府直轄地・天領として九州の政治・経済・文化の中心として繁栄してきた。主な産業は観光や農林業で、観光では水郷日田としても知られ、小京都と呼ばれる豆田町をはじめ観光客で賑わい、ご当地グルメの「日田やきそば」も自慢できる1品だ。

日田市の農業産出額（平成26年）は129億



岩見智成さん

円で、そのうち酪農が38億円で農業産出額の29%を占め、大分県の酪農発祥地として大規模経営体も多い。酪農家戸数は28戸、飼養頭数5911頭（29年1月・県全体1万1971頭）、生乳生産量は3万5514tで県全体（7万1144t（28年度県酪農協出荷分））の約50%を担うほど、県内で最も酪農の盛んな地域である。

（表1）経営・活動の推移

年次	飼養頭（羽）数	飼料作付面積	経営・活動の内容
昭和52年	経産牛6頭	-	父が6頭から酪農経営を開始（現経営者智成誕生）
昭和62年	経産牛28頭	1.2ha	規模拡大のため、繋ぎ牛舎を3年かけて自ら建設（28頭に規模拡大）
平成8年	経産牛28頭	1.2ha	本人（智成）が高校卒業、県外企業に就職し経理や営業職を経験（実業団でバドミントン選手）
平成13年	経産牛50頭	1.2ha	フリーバーン牛舎を自己資金で建設し規模拡大 父の病気もあり、家を継ぐため帰郷し地域の酪農ヘルパーとして就職
平成14年	経産牛50頭	2ha	酪農ヘルパーを経験後、家を継ぐため就農
平成19年	経産牛50頭	6ha	県内で初めて細断型ロールバレーを導入 デントコーン：3ha、イタリアンライグラス：3ha
平成23年	経産牛50頭	12.5ha	父が他界し、経営を継承
平成28年	経産牛54頭	12.5ha	自給飼料生産の効率化のため、土の破碎・播種・転圧が同時にできるスモールシードドリルを、畜産クラスター機械導入事業で導入

(表2) 経営実績 (平成28年)

経営の概要	労働力員数	家族・構成員	1.9人
	(畜産・2000hr換算)	雇用・従業員	1.0人
	経産牛平均飼養頭数		53.7頭
	飼料生産	実面積	530a
	年間総販売乳量		472,075kg
	年間子牛販売頭数		37頭
収益性	所得率		16.0%
生産性	牛乳生産	経産牛1頭当たり年間産乳量	8,791kg
		平均分娩間隔	13.3ヶ月
		受胎に要した種付回数	2.4回
		平均産次数(期首)	3.90産
		平均産次数(期末)	3.30産
		牛乳1kg当たり平均価格	109.8円
		牛乳1kg当たり生産費	80.1円
		乳飼比(育成・その他含む)	46.1%
		乳脂率	3.85%
		無脂乳固形分率	8.82%
		細菌数	1.1万個/ml
		体細胞数	18.0万個/ml
		借入地依存率	47.1%
		飼料TDN自給率	40.3%
乳飼比(育成・その他含む)	46.1%		

### 経営管理・生産技術の特色

岩見牧場の酪農経営は、昭和52年に岩見さんの父が6頭の経産牛を飼ったことから始まる。繋ぎ牛舎と育成牛舎を自ら建設し、昭和62年には28頭、平成13年には50頭規模まで増頭し経営を拡大していったが、父の病気で岩見さんは24歳で帰郷。経営継承を視野に、酪農技術の習得と地域酪農家とのネットワーク作りを目指して、酪農ヘルパーに従事した。

6年前、父の他界で33歳で経営を継承。岩見さんの誕生と同時に始まった酪農経営に大きな縁を感じながら、父の酪農への思いを絶やすことなく、さらなる発展を期して頑張っている。

現在の飼養規模は経産牛54頭、初妊牛6頭、育成牛9頭で、地域の限られた農地をフルに活用した飼料自給率の高い、良質乳生産農場の実現を目指している。



古い牛舎を居心地の良い育成舎に改築

### 【生産コスト低減のための自給飼料拡大】

周囲はまとまった耕作地の確保が難しい地域だが、自給飼料生産を軸とする経営を基本に、平成19年頃より耕作放棄地等の借地を含めて地道に土地の集積を行い、デントコーンの作付けを行っている。

就農時の平成14年は、飼料畑が借地も含めて2haで、自給飼料生産のメリットを生かせる状況ではなかったが、8年かけて飼料畑を現在の5.3haまで拡大。現在は飼料作付け延べ面積を12.5haとし、機械投資に見合い、かつ、生産コスト低減につながる自給飼料生産を行い、乳飼比は46.1%まで抑えられている。

特に作付け面積の拡大を図るため、10年前に大分県で初めて細断型ロールベラーを導入しており、格段に作業効率が改善された。現在では念願であったデントコーン2期作(4ha×2回刈り)を実現し、飼料品質の高いコーンサイレージの通年給与で冬場の乳量低下も抑え、良質乳の安定生産につなげている。

またその後、デントコーンの裏作にイタリアンライグラス3haと、デントコーンとともにスーダン1.3haを作付けしたことで、一層生産コストの低減が図られ、生乳1kg当たりの生産原価を80.1円に抑え、所得の確保



未経産牛は細かく群分けし耐久性の高い健康な牛に育てる



につなげている。

### 【良質乳生産のため作業は基本を忠実に】

良質な生乳を年間通して安定的に生産するため、日常における基本的な管理や技術の徹底を最も重視している。

#### ① 繁殖管理の徹底

分娩間隔を一定に保つため、発情観察を1日4回（朝・昼・夕・夜）確実に実施している。乾乳前の牛は特に注意して状態を把握し、適期に自ら人工授精している。

また、繁殖検診を定期的に獣医師に依頼して、問題のある個体の早期治療により、空胎日数の縮小と、一定した分娩間隔を心がけている。こうした管理により夏場の高乳価時の乳量を確保するとともに、冬場の低乳価時に向けてはF1やET生産を増やし、収益の向上につなげている。



50頭規模のフリーバーン搾乳牛舎

#### ② 自給飼料の品質・収量安定のための分析の徹底

自給飼料面積を拡大し、飼料作物の一定の収量と品質を確保できたことで、サイレージの通年給与が可能となった。現在も、適正な施肥量で飼料生産を行うための飼料畑の土壌分析や、TMRの適正な配分調整を行うためのサイレージの成分分析を徹底している。

施設面では7年前にTMRミキサーを導入。結果として給与飼料の品質が安定し、調整作業や給餌作業も省力化され、乳量・乳質に直結する飼料生産が可能となった。

#### ③ 正確な搾乳作業の徹底

搾乳作業は乳頭にダメージ等を与えないよう、一連の作業を正確に丁寧に行い、牛へのストレスを軽減して良質な生乳生産を行っている。特に、乳頭の刺激からミルクカー装着ま



アブレストパーラー、日々の削蹄にも活躍する



での時間を適正に行い、ライナーズリップを防止することに注意している。丁寧にライナーの乳頭装着を行えば装着音も発生しないことから、従業員にとっても適正作業確認の目安となっている。

### 【安定した経営継続のためできることは実践】

コストを抑えるため、投資コストの高い牛舎建設を自ら施工した父の考えを大切に、自ら実践・行動することで、収支面のメリットや技術面の改善効果を上げている。

乾乳前の牛には、個体ごとの状態を把握するため削蹄を自ら行っているほか、授精適期を見逃さないための発情観察と適期の人工授精を併せて行い、分娩間隔も13.3ヵ月としている。

機械器具の修繕もできる範囲で行い、修繕費の削減に役立っている。

### 【経営成果】

繁殖管理の徹底や、自給飼料の品質・収量の安定のための分析の徹底、正確な搾乳作業の徹底など、基本に忠実に作業を行ってきたことで、安定した良質な生乳生産量を確保でき、購入飼料費の削減で乳飼比は46.1%、生乳1kg当たり生産原価も80.1円となり、目標としていた1000万円以上の所得確保が実現できた。平均産次数も目標の3産を超えて3.6産と長命連産を果たしており、所得向上につなげている。

乳質も、細菌数1.1万個、体細胞数18万個と安定した品質を保ち、平成26年度には九州生乳販連の生乳品質共励会(ミルクアワード)で表彰された。

## 耕畜連携の活動

近隣の耕種農家では後継者のいない経営体が増え、労働力不足で畑の管理が難しくなってきたことから、これらの畑を借り受け(計



一面に広がる2期作目のデントコーン畑

250 a)、デントコーン等を作付けすることで土地の有効利用とその管理も併せて行っている。

さらに今後は、粗飼料自給率の向上と地域貢献を目指し、水稻農家との連携による水田活用のコントラクター部門立ち上げを予定している。立ち上げについては、今年度の畜産クラスター機械導入事業により、汎用型微細断飼料収穫機の導入に目途がつけば、早々に準備を開始する計画だ。

今後は、この組織でWCSの作業受託や水田でのデントコーンの作付けも検討しており、飼料自給率の向上、地域の酪農家への供給、また、県酪農協が運営するTMRセンターへの供給も行っていけると考えている。事業の拡大に当たっては、特に労働力が必要になるため、地元の雇用を考え、地域との連携を大切にしていく。

まずはコントラクター部門の立ち上げに伴う、オペレーターとなる従業員1人の雇用をすでに予定しており、法人化へ向けた準備も行っていく。

## 地域に対する貢献

牛床にはおが屑と戻し堆肥を投入し、ふん尿はロータリー式発酵舎・堆肥舎で堆肥化し、堆肥は全て飼料畑に還元している。また、堆

肥処理に困っている地域酪農家からも堆肥を受け入れ、飼料畑に還元しており、地域の環境保全に役立っている。

岩見さんは日田酪農組合青年部の部長でもある。青年部では地域活動として毎年、市内の保育園や小学校で「搾乳・哺育の体験やバター作り」等を行い、食育活動として命の大切さを教えている。平成29年度は市内の中学校、高校からも依頼を受けており、年間4回の活動を予定している。酪農女性部と連携して、地域のイベントに参加し、牛乳・乳製品の消費拡大運動も行っている。さらに後継者育成のための研修会を開催し、特に経営管理については重点的に行っている。岩見さんの父が早世した際の経営移譲による苦労体験を踏まえ、若い後継世代の負担軽減や経営者としての自覚を促す狙いがある。酪農青年部を牽引するリーダーとして意欲的に役割を担っている。

### 女性の経営参画

家族労働力の改善については、昨年妻と母が体調を崩したことや、将来に向けてコントラクター部門を立ち上げる計画であることを考慮し、雇用形態をとることとした。

28年3月に酪農経験のある女性を雇用する

ことができ、現在の労働力は岩見さんと女性従業員1人が基幹労働力となり、母が補助的作業に当たっている。従業員には、搾乳・育成牛、乾乳牛の管理を行わせ、週休2日勤務で、月8回の休日はヘルパー利用と離農者の臨時雇用で対応している。妻は、今後コントラクター部門を立ち上げ、業務が拡大されることを想定し、経理部門の仕事を中心に参画してもらうことを検討している。家族と従業員の特性と生活を十分に配慮したワーク・ライフ・バランスを重視した農場経営を目指している。

### 将来の方向

今後の経営方針として、経営が安定してきた今を良い機会と捉え、次のステップとして機械導入事業により汎用型微細断飼料収穫機の導入を計画している。それに目途がつけば、耕畜連携のコントラクター部門を立ち上げ、併せて法人化する予定だ。これにより自給飼料面積の拡大や水稻農家の受託作業等を実施する計画で、地域農業との連携や耕作放棄地の活用、環境保全対策、地域での雇用を含め、地域社会とより深く関わっていくことができると考えている。